



## 菊間

Kikuma



**① 荒神社の瓦製灯ろう**  
天保2(1831)年に瓦業者が寄進した灯ろう。火袋の透かしに「金」の文字があることから、金毘羅灯ろうと分かる。かつて、この麓の海岸は船ヶ浦と呼ばれ、瓦が船積みされた。江戸時代の瓦製灯ろうは、近くの金刀比羅神社とかわら館にも現存する。



**② かわら館の展示品など**  
明治17~19年の皇居御造宮瓦で使用された鬼瓦の木型。当時の請負業者宅に現存し、軒丸瓦のサンプルについてはかわら館に展示。同館には近世・近代の鬼瓦、瓦職人・木型職人の作業道具、広島で被爆した菊間瓦なども展示されている。

いぶし瓦の産地・菊間の身近なルーツは、江戸時代に松山藩が設けた製瓦業者の株仲間26軒株にさかのぼります。領内53株のうち、半数の26株が菊間の浜村にありました。

飛躍のルーツは、明治16(1883)年に宮内省から御下命をうけた「皇居御造宮瓦」の請負で、見本に送った瓦で特選の栄誉を受けたのが三州・泉州・菊間の三産地でした。これを機に、同業者の組合が結成されて産地の声価が高まりました。

※かわら館(月曜日) 0898-54-5755

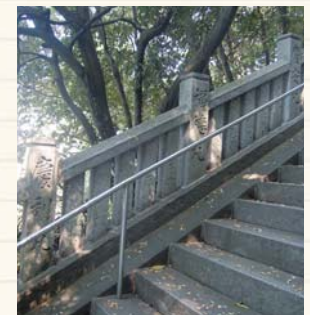
## 波方

Namikata

「海運のまち・波方」の身近なルーツは、明治30(1897)年発足の波方廻船組合にさかのぼります(現、波方船舶協同組合)。塩田用石炭の回漕で、石炭産地(北九州・宇部など)と瀬戸内海の塩田産地を往来するなかで発展していきます。また、菊間瓦焼成後に残る松葉の灰を、練炭工場のある阪神方面へ回漕するスバイ船主たちもいました。波方港界限には、彼らの近代の繁栄・結束を物語る海事遺産が見られます。



**① 赤煉瓦灯明台**  
波方船主が、玉生八幡神社境内の金刀比羅宮に捧げた灯明台。高さ約5m。明治後期頃の築造か。昭和4年の海図には「Lt.F」(ライトハウス・不動光)と記される。もとは海岸の砂浜に建ち、平成17年の県道拡幅工事で現在地へ約10m移動。



**② 船主寄進の玉垣** ※神社石段  
大正初期に波方船主が寄進した玉垣で、船名と船主名を刻んでいるのが特徴。当時、石炭船を所有した③瀬野熊吉・④浅海辰次の旧家塀には、花崗岩や煉瓦をあしらった石塀が現存する。神社の拝殿には、明治43年寄進の船模型がある。